



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	例外状態とメタファー : シュミットとベンヤミンを読むアガンベン、そしてルーマン
Author(s)	鈴木, 純一; Suzuki, Junichi
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 76, 1-19
Issue Date	2023-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89043
Type	departmental bulletin paper
File Information	76_01_Suzuki.pdf



例外状態とメタファー

—シュミットとベンヤミンを読むアガンベン、そしてルーマン—

鈴木 純 一

1. 序

カール・シュミットが『政治神学』の冒頭で「主権者」の核心的な権限を特徴づけるための概念装置として「例外状態」を用いたことは、法学以外の領域でもしばしば引用され、様々に展開されている。多くの場合、このことばを含むフレーズは、その後のシュミットに対する批判的評価の収斂する場となった。「主権者とは例外状況にかんして決定を下す者をいう。」^(注1)という一文は、書かれたのはワイマール時代であるが、その後のナチス政権における独裁制との親和性を指摘されるようになる。すなわち（民主的法治国家と見なされる）共和国から（法的な秩序を逸脱したと見なされる）独裁国家への移行を、言いかえれば、法によって担保される国家秩序から独裁者が主権者として離反することを、シュミットのこの命題は、理論的に支える役割を果たしたのではないか、との批判的評価である。^(注2)

だが、ジョルジョ・アガンベンはシュミットのこのような読解、それを根拠とするシュミット批判に与することはしない。すなわち、シュミットが持ち出す「例外状況」とは、逆に、危機的状況における法秩序の回復を試みるためのものでもある、というのだ。ただし、例外状態と法秩序の関係は連続的な親和関係に置かれているのではなく、「排除と包含」の二重の特徴を帯びている。換言すれば、例外状態は法秩序の「外」に位置付けられることで、法秩序の「内」に取り込まれる、とアガンベンは説明する。このような敢えてパラドクスを誘発するかのような両義的説明は、アガンベンの著作においてしばしば目にするものである。いやそれどころか彼の著作の理論的支柱ないし中核的仕掛けとなっているかのような印象さえ受ける。そして、この両義的な構図からパラドクスを引き出しうる二重性反転の場を、彼は「未分化の領域」と名付け、「決定不可能性」という特徴をその根底に置くことになる。

このような展開の理論的構造は本論の後半で確認するが、ここで注目しておきたいことは、アガンベンの以上のようなアンビバレントな、二重化するスタンスが、「例外状態」という概念の評価にも見ることができるという点である。このようなスタンスの起源を探るために、本論ではまず、アガンベンのベンヤミン読解を、さらにベンヤミンとシュミットの水面下での相

互応答の読解を、辿ることになる。そこに現れるのは、ベンヤミンとシュミットの、一方においては論理構図（形式）における同質性であり、他方においては、法と暴力ないしアノミー状態（内容）に対する視線の違いである。例外状態は法の（静的な）システムに対して大きな変動をもたらす可能性がある、このように両者ともに見ている。しかし、その変動のメカニズム、つまり法の創造、措定、維持、破壊という局面の位置づけ、およびそれらへ期待するものの志向性の違い（暫定的にベンヤミンの解放志向性とシュミットの秩序維持志向性の違い、と言っておく）が見られるというのだ。アガンベンが、ベンヤミンとシュミットの相互応答から引き出す論理の輪郭、これもまた「規範と逸脱」あるいは「包摂と排除」の二重性の観点から考えなければならない。

続いて、この二重性をメタファーへと、敢えて言えば言語の動き方の基本的構造へと繋げることを本論は試みる。メタファーには、言語を無時間的に限定された（静的）トートロジーから解放し、時の変化や場の多様性、対象と意味のもつれた絡み合いを一挙に抱え込むことで、シニフィアンとシニフィエの創造的な「ずれ」を産み出す原理として解釈されてきた歴史がある。この「ずれ」は、メタファーにおいては、逸脱と規範、差異と同一性のパラドクスないし反転として捉え返すことが可能であるが、このメカニズムは、後に見るように、アガンベンが例外状態から取り出そうとする両義性のダイナミズム、反転と決定不可能性の潜在可能性と重なってくるであろう。

この二元化への分解と二項の反転ないし決定不可能性は、論理学の文脈から見れば、いわゆる集合論におけるクラスとメンバーのパラドクスに対応する。すなわち集合を記述する上位レベルのクラス（分類する項、メタレベル）が、要素としての下位レベルのメンバー（分類される項、オブジェクトレベル）として扱われることによって、つまり観察主体と観察対象のレベルの交差によって引き起こされるパラドクス、論理的な真偽の決定不可能性を導出する反転構造（相互入れ子構造）である。アガンベンは、ベンヤミンとシュミットをその中核となる部分で対峙させた『例外状態』という書よりも前に、この論理構造と極めて自覚的に取り組み、消去できない決定不可能な在り方を、あらゆる属性を剥奪された純粋な（言語としてのみ可視的な）存在者の特性として、さらにはいつの日か解放されるであろう共同体のありうべきメンバーの特性として、意味づけている。彼の一連の、いわゆる「ホモ・サケル」構想による著作群よりも前に著された『来るべき共同体』の中心的な主題である。

ここでいわれている「純粋」な言語的なありかたとは、何を意味しているのだろうか。この問いに、直接呼応する整合的な結論を引き出すのではなく、覚東ぬ回り道をしながらか、ずらし、切込み、組み直しながら探りを入れることが本論の最後で行われる作業となる。例えば、ベンヤミンを介して引かれているカフカのテキスト。そこに現れる、何の役にも立たないが、ただ学び、研究の対象になる法。子供の遊びに喩えられる法との関わり合い。このようなイメージに託されているアガンベンの志向性に、ルーマンのシステム理論によって形を与え、再

度メタファーとしての位置づけを考える。本論は、このような記述、書くことの意味を入れ子的に、再帰的に探る試みでもありたい、と考えている。

2. アガンベンと「例外状態」

アガンベンの「ホモ・サケル」構想^(註3)の二つ目に位置する著作『例外状態』が出版されたのは2003年、アメリカで起きた同時多発テロのおよそ2年後のことである。この本のエビグラムには「なぜあなたがた法学者はあなたがたの職務について黙して語らないのですか？」とあり、この文は、たびたび引用され、多様に解釈されている。多くの場合、シュミットの唱えた例外状態とは法的探究の対象となる現象ではなく事実問題であるとされてしまい、法学者の間で法研究の埒外と見做されることへのアガンベンの異議申し立てと捉えられている。法的な秩序と例外状態の関係を重視するアガンベンからみれば、この問題に関して法学者は自身の職務を全うしていない、学的な対象と見做さず放置している、ということなのであろう。

さまざまな国の法的伝統の違いに学説の領域において対応しているのが、例外状態を法秩序の領域に包摂しようと努める法学者たちと、例外状態を法秩序にとって外的なものとなす、言いかえれば本質的に政治的な現象として、あるいはいずれにせよ法の領域外の現象としてとらえる法学者たちとのあいだの区別である。(アガンベン 2007: 48)

とはいえ、法学者たちのこのようなシュミット解釈に対して、法と例外状態の関係を重視しつつもそれを慎重に見極めようとするアガンベンは、法の「内」へ「例外状態」を単純に組み込むことを認めるわけではない。アガンベンのスタンスは明らかにアンビバレントであり、見方によっては意識的な曖昧化とも見える。

実際には、例外状態は法秩序の外部でも内部でもないのであって、その定義の問題は、まさに一つの閾にかかわっているのである。言いかえれば、内部と外部が互いに排除しあうのではなく、互いに互いを決定しえないような未分化の領域にかかわっているのである。(アガンベン 2007: 50)

「未分化の領域」という時、例外状態は法秩序に対して両義的な意味を帯び始める。「閾」にあるということは、どちらにも属する可能性、どちらにも属さない可能性、この両者の特性を有するということにもなる。それでは、例外状態において、この両者は主権者によって恣意的に使い分けることができるものになってしまうのではあるまいか。いわゆるシュミットの「決

断主義」の核心は主権者の決定にあり、そうであるならば、やはりこれは独裁制へと至る論理プロセスを述べているにすぎず、批判の対象とせざるを得ないのではないか。

シュミットを注意深く読もうとするアガンベンを注意深く読めば、そのような結論へ至ることはないであろう。法の内部と外部の「未分化の領域」とは、「互いに互いを決定できない」でいる場、ある意味で、決定を回避する場として説明されている。このような特性を、アガンベンはベンヤミンとシュミットの相互応答関係から、両者の水面下の読みと解釈のやりとりから引き出すことを試みる。

『例外状態』の第4章、それぞれ「例外状態」を巡ってベンヤミンとシュミットの対話が繰り返られるこの章は「空白をめぐる巨人族の戦い」というタイトルがつけられている。出発点はベンヤミンの『暴力批判論』（1921）である。この論文でベンヤミンは、法と暴力の関係に批判的に接近していく。よく取り上げられるように、ベンヤミンは法措定的、また法維持的暴力を「神話的暴力」とし、法破壊的ないし革命的暴力である「神的暴力」と対峙させている。ベンヤミンは、前者の暴力に対しては、人を拘束し抑圧する効力を認め、批判的なスタンスをとるが、後者の「神的な暴力」には人々を解放する局面をもたらす力、後に頻出する「メシア的な瞬間」が宿る力を見る。この意味で、「神的暴力」には解放と救済の可能性、「希望」が託されていると考えられる。このようなベンヤミンの思考の展開は、『ドイツ悲劇の根源』におけるバロック時代、つまり例外状況、決定不可能性、終末論というアレゴリーの時代、さらには最晩年の『歴史の概念について』の第8テーゼにある「例外状況の通常化と救済」という変奏に繋がっていくであろう。

シュミットは、明らかにベンヤミンのこの部分を読んでおり、そこに自らの考えとの同質性を見出すと同時に決定的な違いも読み取り何らかの応答をしなくてはならないと考えた、とアガンベンは確言している。同質性とは法と危機（＝例外状態＝暴力＝非秩序的な状況）との切り離せない関連性である。違いとは、ベンヤミンが例外状態（＝危機）に法からの切り離しと解放を見ようとするのに対して、シュミットは例外状態の法的秩序への回帰を志向することの違いである。

例外状態をめぐるベンヤミンとシュミットの間で交わされた論争において賭けられていたものが何であったのか、いまこそいっそう明確に定義することができる。一方ではいかなる犠牲を払ってでも法との関連のうちに保っておかなければならず、他方ではこの関連から容赦なく断ち切って解放しなければならぬような、同一のアノミーの地帯で生じているのである。すなわち、このアノミーの地帯において問題となっているのは、暴力と法との関係なのであり一究極的には人間の行動の暗号としての暴力の地位なのだ。暴力を法的コンテクストのうちに書き込みなおそうとことあるごとに努めているシュミットに対して、ベンヤミンは純粹暴力としての暴力に法の外部にあっての存在を保証しようと事あ

るごとに努めることによって応じているのである。(アガンベン 2007: 119)

ここでは、つまり、シュミットとベンヤミンを介在させることで、「未分化」で「決定不可能」な状況を作り出す「例外状況」のダイナミズムを明らかにすると同時に、その前段階としての二重の方向性、両義性という特性を示そうとしているのだ、と考えられる。この二重性を、アガンベンは、ポストモダン的な独特の表現方法で説明する。すなわち、法は、適応をもたない純粋な効力である「法律—の—形式」(シュミット)と効力を持たない純粋な適応である「法律—の—力」(ベンヤミン)へ分裂する、と定式化するのだ。

3. 「排除と包摂」の両義性

ところで、このような二重の方向性、両義性は、アガンベンの「ホモ・サケル」構想においては、すでに初期の段階から、極めて意識的に、前面化されている論理構造であり、テキストはその展開として綴られていく。彼の場合、二重性、両義性を表すもっとも代表的な対概念は「排除と包含」の組合せである。これは、包含という関係をとりながらも実質的には排除を通告する、つまり包括的な上位概念の傘下に対象を一旦置きつつ、意味内容はそこからの締め出しを告げるという形式をとる場合と、排除するという意味でかろうじて関係を結ぶ包含、つまり排除という命令の効力を持つことによってつながりを維持する(=包含する)構造をとる場合の、いずれもありうる。このような両義的關係性は、「ホモ・サケル」構想の初期の段階においては、いわゆる排除された剥き出しの生(ゾーエー)と政治的に管理(包含)された生(ビオス)の二重性と重ねられる形で語られる。例えば次のように。

西洋の政治の基礎をなす範疇の対は友—敵ではなく、剥き出しの生—政治的存在、ゾーエー—ビオス、排除—包含である。政治が存在するのは、人間が、言語活動において自分の剥き出しの生を分離し自分に対立させ、同時に、その剥き出しの生との関係を包含的排除の内に維持する生き物だからだ。(アガンベン 2003: 16)

さらにアガンベンはこのような両義的な在り方を、「人民」(≒人間一般)なるものの概念そのものの起源にも潜んでいる、取り除くことができない両義性と捉え、その両極間の振動ないし弁証法を生政治と重ねている。

意味の両義性がこれほど広範かつ恒常的にみられるのは偶然のことではありえない。この両義性は、西洋政治における「人民」概念の本性と機能に内蔵する二面性を反映するもの

であるに違いない。まるで我々が人民と呼んでいるものが実際には単一の主体ではなく、対立する二極間の弁証法的振動であるかのようなのである。(…中略…) 一方には余すところなくなされると主張される包含があり、他方には、自分には希望がないとわかっている排除がある。(アガンベン 2003: 242)

二つの「人民」概念における振動、あるいは弁証法は、後に「内戦」とも呼ばれるようになり、その内戦が歴史的に政治的な「闘争」を特徴づけてきたと展開されていく。例えば、ナチス・ドイツの「収容所」(＝アガンベンはこれを現代における生政治の形式の「範例」とまでよんでいる)におけるユダヤ人の置かれた状況と「ゾーエー」、あるいは現代における両者の溝を埋めようとする「容赦のない、徹底した」試み、等の問題へ繋げられる。そのリアリティについてはここではいったん留保するとして、注目すべきは二重性・両義性の扱い方である。アガンベンは、区分けとしての二元化、つまり二つの項への分類とその静的な特性描写を試みているのではない。「弁証法」や「振動」という言葉が示すのは、その二重性を消去するのではなく、むしろそれを起源とし、原動力とする動的な変容と移り行きのメカニズムに言語的、論理的に迫ろうという試み、この視線であろう。

ちなみにこのような事情が描写される書名の「サケル (聖なる)」という言葉にも、「聖なるもの」のみならず「呪われたもの」、つまり「浄なるもの」と「不浄なるもの」の背反する二重性が含意されている。『ホモ・サケル』では、この両義性が、政治的な決定から排除されていると同時に、その排除によって包含される「ホモ・サケル (聖なる人)」に認められるのみならず、先のシュミットの著作にある「例外状態において決定を下す」主権者、政治的な主権者、という在り方にも見出すことができるとアガンベンはいう。ホモ・サケルと主権者は、例外状態における両極端、あるいは二重性と両義性を有することにおいて、同質的な存在としても位置づけられることになる。(アガンベン 2007: 112 以降)

留意しておきたいのは、このような関係性は、二律背反構造を取りながらも、相互依存ないし相互反転(表裏一体)構造とも考えられることである。このような事情の論理的な位置づけは、扱いは短いが決定的な重みをもって、アガンベンのテキスト『到来する共同体』のなかで展開されることになるだろう。

さて、このような互いを含みつつ排除する、接合しつつ離反する二重性ないし両義性を、言語における「メタファー」という現象の観点から、すなわち差異と同質性の差異化、あるいはシニフィアンとシニフィエの接続と切断の二重化という観点から、照射するとどのように見えてくるのだろうか。これが次節の課題となる。

4. メタファーと二重性

「メタファー」という現象を一言でいうと、言語の「例外」的な使用法、より厳密に言えば、「例外」的な理解のされ方である。慣例に従った言語の使用、一般に認知されている意味（指示対象）に沿った言語的表現を逸脱し、ある意味では、規範的な使用規則を侵犯するのがメタファーである。このような動きをするメタファーは、肯定的には、言語をトートロジーから解放し、歴史的な進化と変化、世界の複雑性に対応する多様性、意味するものと意味されるものの入れ子状にもつれた絡み合い、要約すればシニフィアンとシニフィエの創造的な「ずれ」を産み出す原理としても解釈され、評価されてきた。この「ずれ」は、論理構造においては、逸脱と規範、差異と同一性のパラドクスないし反転として捉え返すことが可能である。このメカニズムはアガンベンが「例外状態」に見ようとするダイナミズム、両義性のパラドクス、意味の相互依存性と反転する構造、決定不可能性と、何らかの意味で関係するであろうか。

ある表現がメタファーであるということは、その表現の意味の二重性が、それを解釈し理解する場で意識されているのが前提となる。そうでなければ「通常」の表現と変わることはないからである。つまり、メタファーの重要な要件の一つは、どこかで、その表現が本来の用法ではない転用された表現である、という理解が生じていなければならない。

その論理的な構造を記号で表現すれば、以下のようになるだろう。ある表現 X が前提となり、それが通常指示する対象を A とする。この A は X のいわゆる規範的な意味であり、とりあえず「本義」と呼んでおく。それに対し、 X がメタファーとして転用された際に指示する対象を B とする。この場合 B は転用された例外としての意味であり、とりあえず「転義」と呼ぶことができる。この指示対象 B には、原則的に、その本来の表現 Y が存在する。

これを前提とすれば、まず、メタファーという現象が理解される以前には、規範的である（自明である、通常である）のは $X=A$ および $Y=B$ という繋がり（構図）である。言い換えれば、これは表現と指示対象との規則に則った対応関係であると見なすことができる。さらに言えば、 $A \neq B$ である前提から、 $A \neq Y$ 、同様に $B \neq X$ 、最終的には $X \neq Y$ という規範的な（自明の、通常の）関係性が成立している。論理上この関係性を、ある意味で一挙に崩すのがメタファーという現象である。

すなわち、 $A=Y$ という関係性、規範的ではない（自明ではない、例外の）関係性がどこかで理解された瞬間、上述した他の同一性と非同義性の関係がドミノ倒しのように崩れ、オセロのように白黒が反転し始める。 $A=Y$ であるという関係が新たに成立したことにより、 A を本来指示対象とする X と、 Y の本来の指示対象である B の新たな関係性、すなわち $X=B$ という関係性が（少なくとも可能性として）成立する。これを前提とすれば、さらには $A=B$ が、最終的には $X=Y$ という関係性さえ成立し始めることになるのである。

しかし事態はそのような完全な反転連鎖として片付けてしまえるほど単純ではない。メタファーは、転用された使用法である、転義である、言いかえれば規範的な在り方に逆らって逸脱した「例外」的な用法である、という理解もまた、消去されずに残っていなければならないからだ。そうでなければメタファーはメタファーとして捉えられることはない。^(注4)ということはどういうことか。先ほど展開した、 $A=Y$ から派生する $X=B$ という関係性、さらには $A=B$ 、最終的にたどり着く $X=Y$ という関係性は、メタファーが出現した後の、 $A \neq B$ であるという前提から、派生的に $A \neq Y$ 、同様に $B \neq X$ 、さらには $X \neq Y$ と展開される関係性と同時に、あるいは並行して成立している、ということなのである。

メタファーという現象が有する論理的な展開可能性の核心は、おそらく、ここにある。換言すれば「差異と同一性」の二重性が意識化されるのである。すなわち差異であったものが同一性として、同時に、同一性であったものが差異として理解される場が生じてくるのである。この変化を通常と例外、あるいは規範と逸脱として書き換えることも可能である。すなわち通常であったものが例外として、例外であったものが通常として受け取られる場、そのように理解される必然性が生じる場が、メタファーという現象においては、成立しているということだ。この関係性は、さらには、規範と逸脱、包含と排除という言葉へと置き換えることもできるであろう。

これをより一般化することができる。実は、このような構造を表現する言語一般が、ニーチェがかつて強調したように、本来メタファーという原理にそもそも支えられているとするならば（ニーチェ 1988）どうであろうか。接続と切断、包含と排除のような言語表現の相対的、対義的な関係を表すあらゆる二元的な対立項の組合せのみならず、普遍と相対、全体と部分等の静的な対立関係を意味する対義語の組合せに関しても同様の関係、両義が同時に成立している関係が現れる可能性が見えてくるのである。また、これら両義的二項の組合せは、潜在的に、論理上、その意味を変えずに両者が反転する可能性も持つ。すなわち、両義的な二項は、そのままの形で、その指示対象を取り換える可能性、ないし、両者を同時に指示する可能性を持っている、ということである。

この不安定さを、論理学は嫌った。近代の合理性という思考は、このような現象が現れることを回避し、整合的なシステム化を試みた。無矛盾の体系、形式システムを規範的基準として進化を遂げてきた。しかし、論理学がいわゆる「ラッセルのパラドクス」によって躓き、逆に、自己言及を可能にするほどの形式システムにおいては、決定不可能な命題を含まざるを得ない構造であることは、ゲーデルの不完全性定理の証明が伝えているところである。またこのような展開を、論理的な合理性の限界と捉えるか、あるいは解放への潜在性と捉えるかは、受け取る者に、さしあたり、委ねられているのであろう。

いずれにせよ、この構造と展開は、「ホモ・サケル構想」においても、当初から暗示されていたものであった。この理論的な起源について、アガンベンも一度、論理学の歴史に沿って言

及している。すなわち、普遍性と個別性の組合せに置き換えて、階層理論のパラドクス、つまり「クラスとメンバー」のパラドクスとして説明している。

5. 論理的階層のパラドクスとしての展開

『到来する共同体』は「ホモ・サケル」構想よりも前の1990年に出版されている。この第3節『見本（範例）』のなかでアガンベンはニーチェの指摘したメタファーの二つの転換（ないし所属という）問題について、ニーチェと異なりアガンベンはそれを「メタファー」と名付けることはしないが、明らかに意識はしつつ言及している。すなわち世界のあらゆる現象と存在（者）を言語に落とし込んでしまうメタファーの「第一の転換」と、さらにはそれらが本来有しており、それぞれ固有であるはずの個別一回性という特性を、類的な在り方へと取りまとめてしまうメタファーの「第二の転換」、メタファーという現象が必然的に引き起こすこの二つの転換（ニーチェ 1988）が避けがたく抱える問題について次のように言及している。

個別的なものと同普遍的なものアンチノミーはその起源を言語活動のうちにもっている。木という言葉は、それが個々の言表不可能な木に代えてそれに固有の普遍的な指示対象を置いている限りで、あらゆる木を無差別に名指しする。すなわち、それはもろもろの個物をその意味の共通の特性（所属の条件 \in ）によって定義されるようなある一つのクラスのメンバーに変えてしまうのだ。（アガンベン 2012: 16）

「木の葉」が「木」となっていることを除けば、このくだりは明らかにニーチェの『道徳外の意味における真理と虚偽について』を言い換え、なぞっている。言語は、それが可視的になった瞬間すでに、この普遍性と個別性、クラスとメンバーの二重性を抱えている。どのような言語的表現も、それが一般に共通する意味を持ちうるという事態が可能である、ないしそのように強制される限り、メンバーとしての意味に拘束されることになる。言い換えれば、個別的现象ではありえないにもかかわらず、一回的在り方を標榜せざるをえない。このような事情が抱える論理的な帰結は集合論のパラドクスへと至る。クラスとメンバーの混合による決定不可能性の問題でもあるが、このアポリアを、アガンベンは確かに意識していた。

個々の区別された対象 m をひとつの全体 M に包摂するものは名辞以外の何ものでもない。ここからクラスの様々な解けないパラドクスが生じてくるのであって、どんな《乱暴なタイプ理論》もこれを解いてみせることはできないだろう。じっさいにも、それらのパラドクスは言語的存在の在り場所を定義している。言語的存在は自己自身に所属すると同

時に所属しないあるひとつのクラスである。そして自己自身に所属しないあらゆるクラスからなるクラスが言語なのだ。(アガンベン 2012: 17)

システムの整合性を保つためにいくら消そうとしてもその都度再び姿を現すひとつの矛盾、つまりメタレベルとオブジェクトレベルの交差によるパラドクス。これを避けるために、バートランド・ラッセルは苦肉の策として「階層性」を維持しようと試みた。すなわちクラスとメンバーを厳格に分けそれらが両義的に解釈されることを「禁ずる」階層性の理論を提示したのはよく知られているが、これをアガンベンはヴィトゲンシュタインを引きつつ《乱暴なタイプ理論》と呼んでいる。このタイプ理論によっては、このパラドクス、接続と切断、包含と排除、普遍と相対、全体と部分、規則と逸脱、規範と例外等あらゆる両義性、二重化、対義語が反転する二重性の自己言及パラドクスを解決(消去)することはできない。これは(少なくとも現代までの)形式論理学が伝えるところである。

ただ、このような状況から逃れているように見える「概念」が一つだけ存在する、とアガンベンは言う。

普遍的なものと同別的なもののアンチノミーを逃れているひとつの概念がずっと前からわたしたちによく知られていた。見本という概念がそれである。(…中略…) 見本の特徴をなしているのは、それが同一のジャンルのすべてのケースに妥当するものであると同時にそれ自体それらのケースの中に含まれているという事実である。(アガンベン 2012: 17)

おそらく若干の展開(ずらし)と言い換えが必要になるだろう。すなわち、この「見本(範例)」は、普遍的なものと同別的なもののアンチノミーを「逃れている」のではなく、むしろ、そのアンチノミーをそのまま、純粋な形で表したものの、つまりその言語という形式からも、その指示対象としての意味からも、アンチノミーという二重性とパラドクスを媒介物なしに体現している概念だと考えられる。すなわち「見本(範例)」という言葉は、言語(概念)が「見本(範例)」であることをストレートに象徴する「見本(範例)」、いわば「見本の見本(範例の範例)」なのである。

だからと言って、この「見本(範例)」という、逆説的に「純粋」な存在が持つ可能性の意義がなくなるわけではない。その「純粋」性、媒介なしに存在している在り方こそ、もう一つの反転の可能性を有しているのではないか。アガンベンは少なくともそう考える。彼は、「見本的な存在は純粋に言語的な存在である」という前提のもと、この「見本(範例)」という言葉に次の様な可能性を託しているのだ。

これら純粋の単独者は、あくまでも見本の空虚な空間の中で、何らの共通の特性、何らの

自己同一性によっても結びつけられることのないままに交信しあう。それらの単独者は所属そのもの、記号∈を自らのものとするためのあらゆる自己同一性を剥奪されてしまっている。(…中略…) 彼らは到来する共同体の見本にほかならない。(アガンベン 2012: 19)

アガンベンの提示する二つの論点を確認しておく。まず「見本的(範例的)な存在」は、そのあらゆる属性を剥奪されているという意味において「単独者」、いいかえれば自己同一性を持たないゆえの純粋な存在であるということ。そして二つ目は、この共通性を持たない存在は、それゆえ、つまり共通性を持たないという共通性のゆえに純粋な「単独者」として「空虚な空間の中で交信しあう」新たな関係性、いいかえれば新たな共同体の、「到来する共同体」の見本(範例)であるということ。

この数年後、アガンベンは「ホモ・サケル」構想の下で、このような「純粋」な言語としての存在を、剥き出しの生、純粋な暴力等のことばへ変転させながら、そしてより一層ベンヤミンのことばに呼応する形で、徹底的に失われているが故に可視的になる共同体の希望を、それこそ逆説的に語ることになるだろう。

6. 「純粋言語」と「純粋暴力」

例外状態とは境界であり闘である。例外状態とは法的な秩序とアノミーを区分する、あるいは両者が接する両義的な領域である。このような例外状態を法的秩序に回収しようとするのがシュミットであったが、それに対して、例外状態を通常状態との反転的な関係へと引き込むことで「歴史哲学」を駆動する力へと転換し、そこから解放の「希望」を引き出そうとするのがベンヤミンであった、とひとまずまとめておく。ベンヤミンは『歴史の概念について』の第8テーゼで以下のように書く。

抑圧されたものたちの伝統は私たちが生きている〈非常事態〉が実は通常の状態なのだと、私たちに教えている。この教えに適った歴史の概念を、私たちは手に入れなければならない。(ベンヤミン 1995: 652)

〈非常事態〉とは、原語のドイツ語では *Ausnahmestand*、〈例外状態〉と同じ言葉である。ここでのベンヤミンの「歴史」概念(「構成される時」という概念)には、例外状態ではない時、「通常」状態の時代ないし歴史などというものは存在しない。すべての「時」は「現在-時 (*Jetzt-Zeit*)」であり、その都度が(危機の際に想起される = 可視的になる)一回的な

瞬間なのだ。これと対をなすのが「空虚で均質な時間」という観念である。どちらが「通常」で、どちらが「例外」なのかは、眼差しの側の問題である。ベンヤミンにおいて、例外／通常という区別は、少なくともこのような言説の中では、その差異化の基準を失う。アガンベン は、さらにベンヤミンの『暴力批判論』を引きながら、この区別が無効化された状態を法と暴力の剥き出しの関係、法によって暴力が抑制されている擬制が廃棄（止揚）された状態と捉えなおす。そしてこの暴力と法の関係は、究極的には「人間の行動の暗号としての暴力の地位」（アガンベン 2007：119）言いかえれば人間の生そのものを表す暴力の姿ないし在り処を示そうとするものである。このことがシュミットとベンヤミンの論争で賭けられていたもの、それをめぐって「争われて」いたものそのものであるとアガンベンはいう。

暴力を法的コンテクストのうちに書き込みなおそうと事あるごとに努めているシュミットに対して、ベンヤミンは純粹暴力としての暴力に法の外部にあっての存在を保証しようと事あるごとに努めることによって応じているのである。（アガンベン 2007：119）

この例外状態をめぐる論争、この両義性を含みつつ異なる方向に進もうとする両者に対し、アガンベンは明らかに中立的ではない。ベンヤミンに加担する。ここでのアガンベンは、「例外」的に、自らの価値判断をストレートにあらわにしているようにも見える。彼は、法の外部にある「純粹暴力」の持つ力に賭ける。すなわちベンヤミンの展開可能性を全力で引き出そうとするのだ。ベンヤミンは1921年の『暴力批判論』において、法措定的、法維持的な暴力を「神話的暴力」とし、批判的な視線の対象としているが、これに対峙させる形で、法破壊的ないし革命的な暴力として「神的暴力」を措定した。この「神的暴力」は「純粹暴力」とも言いかえられ、これは人間の法に先立つ活動、アガンベンの表現を借りれば、「例外状態をめぐる抗争におけるゲームの賭け金」ないし「その抗争から生じる結果」でもあるとも位置づけられる。（アガンベン 2007：123）

それでは純粹暴力（reine Gewalt）とはいったい何を意味しているのだろうか。そこでいわれている「純粹」とはどのような状態を形容する言葉なのか。アガンベンの「例外状態」の探究は、ここで最深部に達する。と同時に、ベンヤミンの読解に沈み込んでいくことで自らの「表現行為」の意義を再帰的に明らかにしようとしているかのようである。その際の鍵となるのは、前節と同様に「言語」である。アガンベンはベンヤミンのある表現を書簡から引用する。少し長いが、その引用を含む部分を引用する。

『ある存在の純粹さはけっして無条件的かつ絶対的なものではありません。それはつねにある条件に従属しているのです。（…中略…）言葉を変えれば、あらゆる（有限の）存在の純粹さは、その存在自体に依存しているのではけっしてないのです（…）。自然にとつ

ては自然の外部に存するその純粹さの条件とは人間の言語活動にほかなりません。』
純粹さについてのこのような非実体的で関係論的などらえ方はベンヤミンにとってはきわめて本質的なものであって、(…中略…)『被造物の根源にあるのは純粹さ (Reinheit) ではなく、純化 (Reinigung) なのだ。』と書くことができたほどであった。(アガンベン 2007 : 122)

核心は、おそらく、「純粹さ」とは対象が先天的に、実体として所有している特徴なのではないということ、それは言語で表現することで「純化された」結果であるということにあるだろう。言語化されるとは、先に見たように、ニーチェに由来しつつその精神を引き継いだと思われる『到来する共同体』のアガンベンのことばから考えれば、「メタファー」として表現されること、といってもいいであろう。あるいは言語に(外部に)転換された「メタファー」として世界を見ることではないのか。この関連はアガンベンにとって「暴力」にあっても同様である。

(…中略…) 純粹暴力と神話的一法的暴力とのあいだの差異は暴力それ自体のうちにあるのではなく、暴力とその外部にある何ものかとのあいだの関係のうちにあるということの意味している。その外的条件とは何か。それは論考の冒頭においてははっきりと言表されている。『暴力批判論の課題は暴力と法および正義との関係を描くことだと言ってよいだろう。』(アガンベン 2007 : 123)

この「描くこと」が課題だというというモチーフ、つまり「書くことによって純化される」というモチーフは、例えば次のようなテーゼとなってベンヤミンのテキスト解釈の深みへと入り込んでいく。すなわち、ベンヤミンにおいて、法措定的ないし法維持的暴力、つまり神話的・法的な暴力は「目的を実現するための手段」であるのに対し、純粹暴力とされている神的暴力とは、適法か否か、あるいは、正義に適っているかいないにか拘わらず、そのような目的志向性を前提とする手段なのでは決してないということ、つまりそれ自身が目的となる自足的な「手段」、在り方なのだということ、このことをアガンベンは強調する。この暴力とは人間の活動そのものの言い換えであり、何らかの機能に還元されえない生そのものということであろうか。

このような純化された暴力が、先に見たように、書くこと、言語化する(=メタファーとなる)こと、つまり「描くこと」によってもたらされるのだとすれば、この言語化において現れる言語自体も、何らかの目的をもつ手段としての言語ではなくなるであろう。

言語に関する論考において、純粹であるのは、コミュニケーションの目的にとって道具と

なる言語ではなく、無媒介に自らを伝達する言語、すなわち純粹で単純なコミュニケーション可能性としての言語であるように、暴力に関しても、純粹であるのは、目的にとって手段の関係にあるような暴力ではなく、自らの手段性〔媒介性〕それ自体と関係しつづけている暴力なのである。(…中略…) 純粹暴力も暴力と法のあいだの関係を提示し証言するものとしてのみ存在を立証するのである。(…中略…) 暴力は、けっして手段ではなく、顕現 (Manifestation) でしかない… (アガンベン 2007: 125)

アガンベンが取り出そうとするのは、純粹暴力の無目的性、それ自体で存立する手段、剥き出しの生、そして言語の純粹な自己開示であろうか。法措定的な暴力が「権力としての法を設置する」のに対し、純粹暴力は「法と暴力のあいだの連関を提示すると同時に断ち切る」ものとなる。この特徴は先に見たメタファーの特性、「接続と切断」「差異と同一」の同時性ないし両義性とびたりと重なってくるように思われる。規範としての本義と逸脱としての転義の関係は、法と純粹 (革命的) 暴力あるいは規則と例外 (状態) の関係に置き換えられ、両者の接続と切断が同時に成立する。この反転、決定不可能性、両義性が、法的拘束ないし関係から解放された、帰属先のない者たちの共同体という繋がらない繋がり の在り方、来るべき共同体の姿として、アガンベンの目には映っていたのかもしれない。

このような展開の先に現れる世界のイメージを、アガンベンはベンヤミンとともにカフカのテキストをもとにスケッチしている。『城』における、ふもとの村での城の法的力が脱臼されて営まれる生 (活)。「法律が法律であることをやめて、あらゆる点で生活と区別がつかなくなってしまふ」ことは、「純粹暴力によってなされる神話的一法的暴力の仮面剥奪」に喩えられる、あるいは、メタファーとして言語化される。もしくは「もはや実地には用いられず、もっぱら勉強されるだけの法」、それは「もはや力を持たず適用もされない法」と、しかしそれとの関係は維持されたままの法となる。カフカにおける『掟の門前』で引き出されなくてはならないこととは、門番への懇願も叶わず死にゆく外来者の不条理なのではなく、正義の門が不活性化され、無活動の状態に置かれるに至ったこと、つまり神的暴力による法の無力化である。

カフカの作品の登場人物たちは (…中略…) 例外状態における法のこの幽霊的な継承と関係を取り結んでおり、(…中略…) それでもって「戯れ」ようとしているのだ。(…中略…) いつの日か、人類は法でもって戯れるときがくるだろう。それはちょうど子供たちががらくたを使って遊ぶのに似ている。それも、それらをそれぞれの規範的な使い方に戻すのではなく、そうした使い方から最終的に解放するためである。(…中略…) この解放を達成するのは、勉強の、あるいは遊戯の任務である。そしてこの勉学的遊戯こそは、ベンヤミンの歿後に刊行された断章のひとつで、世界が絶対的に所有不可能で法制化不可能な

善として現れる、そういう世界の状態として定義されている、例の正義に接近することを可能にする突破口なのだ。(アガンベン 2007: 128 以降)

このような言語の純化による解放のイメージは、何もベンヤミンやカフカに限られているわけではない。例えばトーマス・マンの最晩年の作品『詐欺師フェリックス・クルルの告白』の後半における主人公の語りからも読み取ることができるのではないか。法的規範にも似た堅固な自己言及システムとしての物語の歴史のあとに訪れた、恩寵にも似た解き放ちの、それ自身が目的となるようなクルルのおしゃべり、ただ語るためだけの語りの「身振り」である。もちろんその場合でも、「身振り」である限り、物語システムとの関係は「痕跡」として、「傷」として残り続けているのではあるが。

7. 「社会システム理論とメタファー」という回収

本論でしばしば核心的な論理展開として登場した二重化と両義性、反転と決定不可能性、クラスとメンバーのパラドクスは、実はニクラス・ルーマンの社会理論においても重要な役割を果たしている。その基底的な概念は「再参入／自己転写 (re-entry)」と書いていい。再参入(自己転写)とは、ルーマンのシステム理論におけるシステムの基礎的オペレーション(作動)である「システム／環境」という二元化(二項への差異化、区別)形式が、二項のうちの一つの項である「システム」のなかに再び現れる(現れざるをえない)ことをいう。すなわち、システムとは、自身であるシステムとそれ以外の環境を自らの形式のなかで差異化する作動そのものである。次の点に留意しておきたい。

ルーマンのシステム論におけるこのようなオペレーションは、あくまでも社会システムの基本的要素である「コミュニケーション」において可視化される。「コミュニケーション」とは、ルーマンの理論においては「情報・伝達・理解」における選択連動、簡潔に言えば「情報／伝達」の差異を「理解」することを意味する。従って「システム／環境」の差異化も、あくまでも「情報・伝達・理解」の領域で生じる「コミュニケーション」上の出来事であり、実体的な(物理的な)作動を意味するものではない。いわば記号的な操作であり、プロセスである。また、「環境」とはあくまでも「システム」との関係で現れるものであり、相対的なものである。「システム」とは、故に、この相対的な「システム／環境」差異化そのものであるともいえるが、その二つの項の差異が、差異の一方の項に入り込んでくるのが再参入である。

これが意味するのは、システムが「システム(システム／環境の差異化)／環境」であるという入れ子構造であり、この構造は、記号論的には、システムの「二重性(自らを二分化して描写すること、およびその疑似的無限背進=メタ化=二次観察化する形式)」を示している。

これは、コミュニケーションが、コミュニケーション自身をメタとオブジェクトの二つのレベルに分けて自己言及することを意味しており、理論的に見れば後に「振動」という言葉で展開されることになる。敢えてロジックとして突き詰めればトートロジーとパラドクスを同時に引き起こす「自己言及と他者言及」の交差ということになるだろうか。

再登場の規則がシステムと環境の区別に応用されることによって、システムと環境の区別がシステムのなかで再び現れねばならなくなる。システムの中に、である。(…中略…) システムそのものが、システムと環境の差異を生み出し、観察するのである。システムがその差異を生み出すのは、作動することによる。自身のオートポイエシスという文脈において[すなわちあくまでも内的に] そのように作動することによって、自己言及と他者言及の区別が必要になる。(ルーマン 2009:196)

ただし、このパラドクスは、静止しているパラドクス命題が記述されたものではなく、自らがそれを原動力に自己展開していく動的なものである。システムは、自らのシステム差異化運動を対象として二次観察(メタレベルからの観察)をすることで更なるオペレーションを、パラドクスを観察するパラドクスとして、絶えることなく自己再生産をし続けていると考えられる。ルーマンはこのメカニズムに「オートポイエシス」という概念を生物学から転用して一般化している。ここでいう二次観察とは、いわば先行する観察の観察、このメタ化の連続体であり、完全なる(絶対的な)メタレベルなのではない。

パラドクスを分解するものとして用意された脱出策は、形式への形式の、あるいは区別されたものへの区別の再登場という概念によって指し示される。形式のなかの形式は、形式であると同時に形式ではない。したがってそこにおいて問題となっているのはパラドクスであると同時に、展開されたパラドクスなのである。(ルーマン 2009:194)

アガンベンが、ベンヤミンのテキストに見ようとするのは、この「展開されたパラドクス」と考えることはできないであろうか。つまり、そこで本来ならば論理的には停止してしまうはずの二重化ないし両義性による自己言及パラドクス、この(自他の/クラスとメンバーの/真偽の)決定不可能なパラドクスを闕で反転させ、「純粹」な暴力として、「生」そのものとして、そしてその描写(言語化=メタファー)として純化していくことではなかったのか。シュミットが試みた例外状態の内と外両者における主権の決定力に対して、あるいは法的な秩序への全面的な回収に対して抗い、「剥き出しの生」を可視的にし、さらにはその先に何のものにも帰属しない者たちの共同体を夢想したのではなかったのか。あたかもカフカの物語に現れる、城のふもとの村人の生活のように。あるいは、ただ学ぶだけで実効的な力はない法規範のよう

に。目的を持たぬ手段、ただそこで純粹に関係を取り結ぶだけの遊戯のように。

この構造を言語に絞って再度定式化するならば、この運動は、メタファーの作動そのものであろう。「差異と同一の差異」をその都度現出させては、その位相を変化させ、シニフィエとシニフィアンとの関係性を新たに組み直していく（ことしかできない）メタファー。喩えるものと喩えられるものの役割分担を理解の場で宙吊りにし、主客の構造を無効化させることで「言語」ないし「表現すること」の自律的な領域を現出させるメタファー。このメカニズムと重ねることができるのではないだろうか。

本論は以上の問の解を試みるものではない。そうではなく、せいぜい問題の在り処を自己開示することの実践である。例外状態の両義性、包括的排除に代表される決定不可能性、再帰構造の理論的な定式化、パラドクスの反転によって現れる純粹暴力、ここから見えてくる言語化の遊戯性、そしてこれらすべてを覆うメタファーという例外としての通常。フーガ形式をとった自己追跡的な記述が、本論の純粹な「手段」であって欲しいと願っている。

注

- (1) カール・シュミット（田中浩他訳）『政治神学』未来社、1971、11頁。なおこの翻訳の「例外状況」とは原典のドイツ語では *Ausnahmestand* のことであり、本論で引かれる、アガンベンの邦訳で用いられている「例外状態」という訳語、ベンヤミンの邦訳で用いられている「非常事態」という訳語と同一のことばである。本論では「例外状態」ということばを地の文では優先する。
- (2) このような状況を説明している邦文文献の代表として、長尾龍一のシュミットに関する「解説」を挙げておく（所収：カール・シュミット『危機の政治理論』、ダイヤモンド社、1973、367頁他）。
- (3) 「ホモ・サケル」構想に関して、岡田温司は以下のように述べている。「(…)、そもそも「ホモ・サケル」の全体が、主権権力による生分離分断のメカニズム—その起点にあるのがゾーエー／ビオスの分割—を、政治と哲学、言語と法、さらに神学との交差において批判的に検証することで、その彼岸もしくは此岸で新たに〈生の形式〉を追求する企てであった、とも言い換えることができるかもしれない。(…中略…) 思考の潜勢力とは、あるいは潜勢力の観想とは〈生の形式〉に与えられた別の名でもある。そもそも、西洋の政治や経済を導いてきた、実効性や有効性や生産性という至上命令を乗り越える志向が「ホモ・サケル」計画の全体を導いてきたのだ。」(岡田 2018: 36-42)
- (4) 慣用的な使用法によってメタファーであることが意識されなくなったメタファー、いわゆる「死んだメタファー」がこれに相当するであろう。

〈参考文献〉

- アガンベン、G. 上村忠男、他訳（2001）『アウシュヴィッツの残りもの』未来社
 アガンベン、G. 高桑和巳訳（2003）『ホモ・サケル』未来社
 アガンベン、G. 上村忠男、他訳（2007）『例外状態』以文社
 アガンベン、G. 上村忠男訳（2012）『到来する共同体』月曜社
 Benjamin, W. (1921) *Zur Kritik der Gewalt*, in Id., *Gesammelte Schriften*, Frankfurt a. M., Suhrkamp, 1972-1989, vol. 2. 1. (邦訳は、ベンヤミン、W. 浅井健二郎訳（1999）「暴力批判論」『ドイツ悲劇の根源（下）』所収、ちくま学芸文庫)

- Benjamin, W. (1942) *Über den Begriff der Geschichte*, ibid, vol. 1. 2. (邦訳は、ベンヤミン、W. 浅井健二郎訳 (1995) 「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション1』所収、ちくま学芸文庫)
- Blumenberg, Hans (1999) *Paradigmen zu einer Metaphorologie*. Frankfurt a. M.
大黒岳彦 (2016) 『情報社会の〈哲学〉』勁草書房
- ド・マン、P. 土田知則訳 (2012) 『読むことのアレゴリー』岩波書店
- デリダ、J. 藤本一勇訳 (2008) 『哲学の余白 (下)』法政大学出版局
- Kafka, F. (1983) *Erzählungen*. In: *Gesammelte Werke*; herausgegeben von Max Brod, Frankfurt am M., (Fischer Taschenbuch Verlag)
- Luhmann, N. (1998) *Die Gesellschaft der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (邦訳は、ルーマン、N. 馬場靖雄他訳 (2009) 『社会の社会 I・II』法政大学出版局)
- Mann, Th. (1990) *Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull*, In: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*, Bd. 7, Frankfurt am M., (Fischer Taschenbuch Verlag)
- Nietzsche, F. (1988) *Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinn*. In: *Kritische Studien Ausgabe 1*. München (邦訳は、ニーチェ 『道徳外の意味における真理と虚偽について』 (1995) 『ニーチェ全集第 I 期第 2 巻』白水社)
- 岡田温司 (2018) 『アガンベンの身振り』月曜社
- 岡田温司 (2021) 『アガンベン読解』平凡社ライブラリー
- 佐藤信夫 (1992b) 『レトリック認識』講談社学術文庫
- Schmitt, C. (1922) *Politische Theologie*, München-Leipzig, Duncker & Humblot (邦訳は、シュミット、C. 田中浩、他訳 (1971) 『政治神学』未来社)
- シュミット、カール (1973) 『危機の政治理論』ダイヤモンド社
- 鈴木純一 (2010) 「「メタファー」と「メタ思考」」『メディア・コミュニケーション研究』58、pp.39-56
- 鈴木純一 (2019) 「社会理論における観察概念から見たメタファーの機能」『メディア・コミュニケーション研究』72、pp.75-93

(2022 年 11 月 8 日提出、2023 年 1 月 29 日受理)

《Zusammenfassung (summary)》

Ausnahmezustand und Metapher

Junichi SUZUKI

In diesem Aufsatz wird das Verhältnis von Metapher und Ausnahmezustand untersucht. Carl Schmidt, ein deutscher Jurist des 20. Jahrhunderts, verwendete in seiner Forschung eine einzigartige Methodik. In seiner Arbeit behandelte er “Ausnahmezustand” als besonderen Begriff und verband ihn mit der Eigenschaft “souverän”. Der zeitgenössische italienische Denker Giorgio Agamben sieht diesen “Ausnahmezustand” als “bare life” und charakterisiert ihn als Bereich vielfältiger Widersprüche. Inspiriert wurde diese Idee offenbar von Walter Benjamin. Insbesondere sein Artikel “Zur Kritik der Gewalt” spielt eine große Rolle in Bezug auf den Begriff der “reinen Sprache”. “Reine Sprache” ist gewissermaßen eine Paraphrase des “bare life” und hat einen “mehrdeutigen” Charakter. Andererseits sind Metaphern auch ein ungewöhnlicher Wortgebrauch und haben mehrdeutige Eigenschaften. Dieser Aufsatz untersucht im Detail solche sprachlichen (metaphorischen) Widersprüche und Paradoxa, die durch Ausnahmen verursacht werden. Als Ergebnis stellen wir fest, dass diese Struktur und dieser Prozess mit Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme übereinstimmen. Abschließend zeigt dieser Aufsatz, dass sich das Verhältnis von Metapher und Ausnahmezustand durch seine Konzepte von “Autopoiesis” und “Re-entry” erklären lässt.

